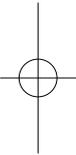
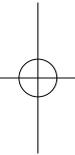


# 2019

# 国語



## 注 意

1. 試験時間は、15：00～15：50の**50分**です。
2. 問題は ㊦ から ㊧ まであります。
3. 解答用紙に、受験番号と氏名を書きなさい。
4. 解答はすべて**解答用紙**に書きなさい。
5. 先生の指示があるまで、問題用紙をあけてはいけません。
6. 問題についての質問はうけつけません。
7. 試験が終わったら、解答用紙を裏返しにしておきなさい。

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

中学二年生の「僕」と今井花香は東京から瀬戸島村にやってきた二人だけの山村留学生で、全校十四人の小さな中学校に通っている。花香は将来のオリンピック候補と言われていた水泳選手だったが、小学六年生の頃に右膝に全治半年の怪我をして以来、泳ぐことを拒んでいた。ある日、「僕」は担任（坂ちゃん）から花香がいなくなったという電話をもらう。以前、新しくオープンする村営プールで、独りで水面を見つめる花香の姿を見たことがあった「僕」は、花香を探しに村営プールへと自転車を飛ばしていく。

ずいぶん苦勞してプールにたどり着いた。① 闇の中に沈みこんだ四角い建物は、しんと静まり返っている。

人の気配がする。僕の勘も捨てたものじゃない。足音を忍ばせて中に入る。照明は点いていないが、ガラス張りの天井から月の光が入りこんで、黒つぶく見える水面をぼうつと照らし出していた。

花香はスタート台に立っていた。いつものジャージとTシャツ姿。背中が丸まり、うなだれて水面に視線を落としている。さて、どうしよう。このまま声をかけ、説得して家に連れて帰るか。それとも坂ちゃんに連絡して助けに来てもらうか。

それは大袈裟だ。どうせ、ちよつと気に入らないことがあったから家を出ただけなんだろう。どうなるか、出たところ勝負だ。

「探したぜ、今井」

花香がゆつくりと振り向く。僕は袈裟に脚を引きずりながら近づいた。少しは同情を引いてもらえるかと思ったんだけど――。

「」花香の顔が歪む。何だか安っぽいテレビドラマみたいな場面だ。

「プールに飛びこんだって死ねないぜ」

上半身だけ僕の方を向いたまま、花香が凍りついた。② ようやくスタート台のところまでたどり着き、ひんやりしたコンクリートの上に座りこむ。演技じゃなくて、本当にうめき声が漏れ出た。

「参ったよ。お前を探してたら自転車で転んじゃってさ。膝が痛い」

「そう」花香が水面に視線を移した。ここは③ 直球勝負だと思い、僕は切り出した。

「何で家を出たんだよ」

「あそこは私の家じゃないから」

「そういうの、屁理屈<sup>b</sup>って言うの。何が気に食わないんだよ。深見<sup>②</sup>さんのせいかな？ あの人、お前を東京に連れ戻<sup>もど</sup>しに来たんだろう。どうすんだよ。帰るのか」

「知らないわよ、そんなこと」

「知らないって、自分のことじゃないか」

「どうしていいか分からないの」

僕はすつと息を呑<sup>の</sup>んだ。痛む膝をかばって立ち上がり、横に腰を下ろす。月の光がプールの水面を照らした。

「膝が痛い辛いな。ここまで自転車で来るの、大変だったよ。でもお前の膝は治<sup>ち</sup>ってるんだろう？ 深見さんがそう言った」

花香がスタート台から降りて屈<sup>かが</sup>みこみ、指先を水につけた。手首まで浸<sup>ひた</sup>したところで、<sup>④</sup>まるで熱湯に触<sup>ふ</sup>れてしまったように慌<sup>あわ</sup>てて手を引き抜<sup>ぬ</sup>く。

「無理よ」

「じゃあ、何でここに来たんだ」

「分からない」

「泳ぎたいんじゃないのか」

のろのろと顔を上げる。今にも泣き出しそうに顔が歪<sup>ひだ</sup>んでいた。また<sup>⑤</sup>水に手をつけ、今度はもう少し長くそうしていた。水をかき回す手が歪<sup>ひだ</sup>んで見える。立ち上がり、スタート台に立つと、裸足の爪先<sup>つまさき</sup>が台の先端<sup>せんたん</sup>を掴<sup>つか</sup>むようにきゅつと曲<sup>ま</sup>がった。背中の筋肉が盛り上がり、今にも飛びこみそうに見える——だが、そこまでだった。溜息<sup>ためいき</sup>についてスタート台から降りると、右膝をかばうように手を添<sup>そ</sup>える。体が萎<sup>しぼ</sup>み、肩が震<sup>ふる</sup>えだした。

彼女の心の底に渦巻<sup>うずま</sup>くものを、僕は必死で感じ取ろうとした。膝は治<sup>ち</sup>っているはずだ。何を考えたのかは分からないけど、半年のブランクの後、たった一回泳いただけで投げ出してしまうのは、あまりにも情けなくないだろうか。ふだんの強気な態度を考えれば、どうにも彼女らしくない。

花香はそのまましばらくじっとしていたが、突然<sup>とつぜん</sup>背筋を伸ばし、助走をつけていきなりプールに飛びこんだ。僕は慌<sup>あわ</sup>てて身を乗り出した。

服が邪魔じやまになっているはずなのに、悠然ゆうぜんとクロールで突き進み始める。僕は水泳に関してほとんど素人しらうとだけど、そのフォームが無駄なく綺麗なものであることぐらいは分かった。何だよ、やっぱり治なってるじゃないか。プールサイドに回りこみ、彼女と並んで走った。五十メートルを泳ぎきった花香がスタート台に手をかける。体を持ち上げようとして手が滑すべり、背中から水に落ちた。笑ってしまった。

「何よ」花香が僕を睨にらみつける。濡ぬれた髪が額に張りつき、息が荒くなっている。

「ちゃんと泳げるじゃないか」

⑥ 違うの。こんなの、私の泳ぎじゃない」

「分かんねえな。何だよ、それ」

「ただ泳ぐだけなら誰でもできるでしょう。あんただって泳げるぐらいなんだから。でも、私の泳ぎは、そういうのとは違う……分かんないでしょう、こんなこと言っても」

「いや」何となく分かった。一流の選手は、みんなこんな感じなのだろう。

「勝つことの面白さが分かってきて、そのためなら何でも犠牲ぎせいにしてもいいって思ってた。でも、こんなじゃどうしようもないのよ。怪我してから初めて水に入った時、全然違ったから。ショックだった。それまでは、泳ぐことなんて歩くのと同じだったのに、水が凄すごく重くて、全然前に進まなかった」

「それで泳ぐのをやめちゃったのか？ ずいぶん諦あきらめが早いんだな」

「半年泳がないだけだったのに、全部忘れてた……私、四歳の時から何年も泳いできたのよ。一日何時間もね。それでやっとな、突き抜けるような感覚が分かってきたのに」

「突き抜ける？」

「水の抵抗ていこうがなくなると、逆に後ろから水に押おされるような感じ。それが全部消えちゃって、泳いでも苦しいだけだった。何年もかけてやっとなと体で覚えたのに。それを取り戻せるかどうか……ずっと積み重ねてきたものを、あんな馬鹿ばかな事故でなくしちゃったのよ」

花香が、燃え上がるような目つきで僕を睨にらんだ。顔を水につける——炎ほのおと水がぶつかり合い、炎が勝った。ざぶりと体を沈めると、水の中から僕を見上げる。揺ゆれる水の中で、しっかりと炎が燃えていた。レベルが高いが故に、花香はもどかしさに身悶みもだえしたのだ。言うことをきかない体。失われる技術。だけど、水泳選手としての彼女は死んでいない。自棄やけになったつもりで、自分の力にまだすがっている。

⑦ 彼女の目に宿った炎は、超一流の選手だけが持つ本能の光なのだ。

(堂場瞬一『少年の輝く海』による)

(注) 深見さん：：東京から訪れた花香の水泳のコーチ。「僕」は二日前に「深見さん」から花香の怪我のいきさつを聞いていた。

問一 波線部 a・b・c の意味としてもっとも適当なものを次の中からそれぞれ選んで、記号で答えなさい。

a うなだれて

- ア 深く思い悩んで肩を落として  
イ 呆然として全身の力が抜けて  
ウ 失望して首を前へ垂らして  
エ 不満そうにほおをふくらませて  
オ 不安そうに頭を低く沈めて

b 屁理屈

- ア 矛盾だらけでつじつまが合わない理論  
イ すぐに消えてしまいそうな道理  
ウ 誰の理解も求めていない冷めた言い方  
エ 思わず笑ってしまうような無理な言い訳  
オ こじつけとしか思えない理由付け

c 悠然と

- ア 何も気にせず勇ましく  
イ 気持ちを奮い立たせて  
ウ 自信に満ちた様子で  
エ ゆったりと落ち着いて  
オ 堂々として伸びやかに

問二 傍線部①「闇の中に沈みこんだ四角い建物は、しんと静まり返っている」とありますが、この情景の説明としてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 真つ暗で吸い込まれそうな空間を前に、尻込みしりこをしている「僕」の心境が映し出されている。
- イ 暗闇の奥で静まり返っている辺りの景色に、「花香」の心に募のる周囲への不信感が表されている。
- ウ 暗闇に包まれた風景が不気味さをかきたて、「僕」が踏み出す場面に緊張感きんちやうかんを生み出している。
- エ 謎めいた「花香」の行動に振り回されて慌てる「僕」の様子と対照的に、静かに描かれている。
- オ これから「僕」と「花香」が本音で語り合う場として、落ち着いた雰囲気ふんいきをかもし出している。

問三 空欄くうらんに入るもっとも適当な会話を次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 痛そうだね      イ 来ないで      ウ 一人で来たの      エ 探してくれたの      オ 何かあったの

問四 傍線部②「花香が凍りついた」とありますが、この時の花香の心情としてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 「僕」に思い悩んでいる自分の心の中を見透みかされてしまった驚おどろき。
- イ 独りきりでいたいのに「僕」に見つけ出されてしまった恥はずかしさ。
- ウ ずかずかと心の中に踏み込んでくる無神経な「僕」への腹立たしさ。
- エ 自分の気持ちを「僕」にさえ全く理解してもらえそうにない悲しみ。
- オ 「僕」の存在を無視しようとしてもできずに、心が乱される苦しさ。

問五 傍線部③「直球勝負だ」から読み取れる僕の意図として、もっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 今日こそ本当の思いをぶつけ合い、「花香」とのわだかまりをといて親友になろうということ。
- イ あれこれ考えるよりも本音をぶつければ、「花香」も全部話さずにはいられないということ。
- ウ 当たり障りのない会話をするよりも、「花香」の本心に迫る言葉を投げかけようということ。
- エ 絶対に「花香」に理解してもらえないはずは無いけれど、勇気を出して告白しようということ。
- オ 策略通りに話しかければ、今なら「僕」の言葉は「花香」の心に響くだろうということ。

問六 傍線部④「まるで熱湯に触れてしまったように慌てて手を引き抜く」という行動をとった花香が、傍線部⑤「水に手をつけ、今度はもう少し長くそうしていた」のはなぜですか。具体的に六十字以内で説明しなさい。

問七 傍線部⑥「違うの。こんなの、私の泳ぎじゃない」とありますが、花香が考える「泳ぎ」とはどのようなものですか。解答欄に合うように三十字以内で答えなさい。

問八 傍線部⑦「彼女の目に宿った炎」には、「花香」のどのような心情が表れていますか。二十五字以内で説明しなさい。

問九 本文の説明としてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 真夜中のプールという非日常的な空間を舞台にすることで、現実から目を背ける少年少女の心理が丁寧に描き出されている。
- イ 月光の反射する水面や目に宿る炎などの視覚的イメージや水音といった聴覚的な表現が、一層幻想性を際立たせている。
- ウ 多用される会話を通して細やかな心の動きが描き出され、「僕」や「花香」といった個性的な人物像が生み出されている。
- エ 「僕」の視点を通して、挫折や葛藤と向き合い、それを乗り越えていこうとしている「花香」の姿が描かれている。
- オ 「僕」の思考の流れに沿って場面が展開し、困難に打ち克って力強く生きる主人公の姿を印象づける結末となっている。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

われわれ治療家のもとに子どものことで相談に来る両親にお会いすると、一般的な意味において、その親のどこが「悪い」などとは簡単に言えないこと<sup>a</sup>が多い。もちろん、反省しだすなら、誰だって反省すべきことはあるだろう<sup>b</sup>が、他の家庭や親子関係と比較して、特別に変なところ<sup>c</sup>があるわけではないのである。

しかし、家庭内暴力をふるう子どもに言わせると「親が悪い」のであって、そのために<sup>①</sup>子どもはさんざんに暴力をふるうのである。それが時に両親を死に至らしめるほどのものであることは、新聞の報道などによって、よく知られているとおりである。

両親にすると自分たちは特別に他と比べて悪いところ<sup>d</sup>があるとさえ思えないのに、子ども<sup>e</sup>が荒れ狂うので、ついには自分の子が精神病ではないか、と思う人も多いのである。しかし、子どもたちは精神病ではない。それでは彼らは何に對して怒り狂っているのだろうか。

これは端的に核心を突く例なので、これまでも述べたことがある<sup>f</sup>が、次のようなことがあった。両親が暴力をふるってくる子どもに向かって、自分たちがこれまで何でもおまえの欲しいものを与えてやってきたのに、何が不足で暴れるのかと尋ねた<sup>たず</sup>。それに対して子どもは、「うちに宗教がない」と答えたのである。

このように子どもが発言してくれたのは、X からであり、普通はなかなかこのような表現もできず、本人でさえ何が不足であるのかはつきりとはわかっていないことが多い。

しかし、この子のように明確に言われた場合、多くの日本の家庭においては、答えに窮する<sup>（注）</sup>のではなからうか。ここで、子どもが「宗教」と言っていることは、単に葬式を仏教でするかどうかなどというのではなく、もっと本質的な問いかけであることはもちろんである。

考えてみると、<sup>③</sup>この親子の問答は日本の現在の状況をきわめて端的にあらわしているものと言える。「欲しいものはすべて与えた」と言うことは、本当にひるがえって考えると、神のみが言えることではなからうか。

他人の欲するものをすべて知り、そのすべてを与えることなど人間にできるはずがない。しかし、多くの親はそれを子どもにしてやってきたと思う。いったいこれはどうしてなのだろう。

これは物質的な豊かさをすべてと思うところにあると思われ。とくに、現在、親となっている人たちは物質的な窮乏<sup>（注）</sup>を体験した人が多いので、自分の子どもにはこの苦勞をさせたくない、というよりはむしろ、多くのものを与えてさえやれば、すなわちそれで満足であると思っている。しかし、それは「豊かな」ことであろうか。その点を、子どもたちはY 突いてくるのである。

ものの豊かさがすべてであるならば、確かに、現代人はだいたい「神」に近づいていると言えるかもしれない。「欲しいものはすべて与えた」という親には、無意識に神に近づいたものとしての傲慢(まごころ)さがある。

A、それは実のところ神に近いわけでも、豊かなわけでもない。絶対に不足しているものを指して、子どもは「宗教がない」と言ったのである。「このように考えると、家庭内暴力の子がよく親に対して、「なぜ僕を生んだのか」と食ってかかる事実が思い起こされる。これはむちやくちやなことを言っているようだが、少し考え直してみると、「なぜ生まれてきたのか」、「どこから来たのか」という人間存在にとって、<sup>④</sup>もつとも根元的な問いにつながっているように思われる。

これらの、もつとも根元的なことを不問にして、ただ物ばかり与えられ、しかも、それで何の不足もないだろうなどと断定されては、子どもとしてはたまったものではない。こんなことを考えると、子どもたちが暴力をふるうのも無理はないとさえ感じられるのである。

どうして、現代の子どもたちはこのような根元的な問いかけを、しかもきわめてラディカルな形で、親に対して投げかけてくるのであるか。それは多くの親たちがあまりにもそのことを忘れているからである。

大人は忙しいのだ。家が必要だし、車も欲しい。それに、家にも車にもいろいろ種類がある。親類の誰それが、友人の誰かがどんなのもっているかも気になることである。B、何をすることもお金がいるのだ。こうしてあまりにも忙しくしていると、お金がすべてのような錯覚が起こってくる。

もつとも、あこ(まごころ)ぎにお金のためこんだ後で、「皆さん心が大切です」とか説教したり、お金のもうけ方がわからぬのであきらめたあげく——と言っても簡単にはあきらめられぬものだが——「愛情が大切」などと強調してまわる人たちもいる。

しかし、後述するように、子どもたちの問いかけはそんなものを一挙に破ってしまう強さをもっている。家庭内暴力の子に、どれほど立派な「説教」をしても、おさまることはないであろう。

大人たちの現実認識があまりにも単層的で、きまりきったものとなるとき、子どもたちの目は、大人の見るとは異なった真実を見ているのである。われわれ大人の目は、常識というものによって曇らされている。子どもたちの透徹(てうてつ)した目は、異なった真実を見る。

しかし、残念ながら多くの場合、彼らは言葉をもたない。したがって、彼らは言語表現の道を断たれ、いわゆる「問題行動」を通じてしか表現の手段をもたなくなるのである。ここに<sup>⑤</sup>児童文学の存在意義が生じてくる。子どもの目をもって、ものを見つ、言語表現によってそれを表現することが、その課題なのだ。

(河合隼雄『子どもの本を読む』による)

(注1) 窮する… 困ること

(注2) 窮乏… 物やお金が無く生活に困ること。

(注3) 傲慢… 偉そうにして周囲の人々を見下すような態度のこと。

(注4) ラディカル… 過激な様子のこと。

(注5) あこぎ… 欲が深くやり方が汚いこと。

(注6) 透徹… 澄み切っていること。

問一 波線部 a～f の中でほかのものとは違う働きをしているものが二つあります。それぞれ記号で答えなさい。

問二 傍線部①「子どもはさんさんに暴力をふるう」とありますが、筆者はこの問題をどのように考えていますか。もっとも適当なものを

次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア どの家庭にも何らかの問題はあるので、子どもが反発して家庭内暴力をおこすのはしかたがない。

イ 豊かな家庭で子どもに不足がないはずなのに暴れる場合は、子どもに原因があると考えられる。

ウ どの家庭にも何らかの問題はあるが、それに反発して家庭内暴力をおこす子どもは許してはいけない。

エ 豊かであっても宗教を信じない家庭にはしばしば起こる問題なので、子どもと宗教について語り合うべきだ。

オ 問題のない家庭など存在しないが、子どもが暴れる場合その原因を親が理解していない場合が少なくない。

問三 傍線部②「それが時に両親を死に至らしめるべく知られているとおりである」とありますが、その内容を正しく言い換えたものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 不満を抱えた子どもが両親を憎み暴力事件をおこしていることは、世の中では誰もが知っている。
- イ 新聞は、両親を憎み殺そうとする子どもが現代社会には存在することを広く人々に訴えている。
- ウ 子どもがふるう暴力が原因で両親を殺してしまう場合があることは、新聞などで社会的に知られている。
- エ 親子関係が悪くて結果的に両親を殺してしまう不幸な事件が世の中にはあることを、新聞などは伝えている。
- オ 親が悪いからといって親を殺そうとして暴力をふるう子どもがいることを、新聞がしばしば報じている。

問四 空欄Xにはどのような表現が入りますか。もつとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア この子があまりよくなっていない
- イ この子がずいぶんよくなってきている
- ウ この子が良いとも悪いとも言えない
- エ この子が心情的に満たされている
- オ この子が物質的に不足している

問五 傍線部③「この親子の問答は日本の現在の状況をきわめて端的にあらわしている」とありますが、「日本の現在の状況」とはどのようなことを指していますか。「親は〜、子どもは〜」という形で七十字以内で説明しなさい。

問六 空欄Yに入る適当な語句を五字以内で自分で考えて答えなさい。

問七 空欄A・Bに入る接続語を次の中から選んで、それぞれ記号で答えなさい

- ア そして      イ つまり      ウ なぜなら      エ だから      オ しかし

問八 傍線部④「もつとも根元的な問い」を家庭内暴力の子がするのはなぜだと筆者は考えていますか。もつとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア いつも物ばかり与えてくる親にうんざりし、生まれてきたのは自分のせいではないと訴えたいから。  
イ 本当は豊かではないのに偉そうに振る舞う親に、いつか本当のことを言ってやろうと子どもが思っていたから。  
ウ 家や車などの欲望に振り回されていても、子どもには十分な豊かさを与えていると親たちが思い込んでいるから。  
エ 忙しくお金の事ばかり考えている大人に育てられていると、子どもは本来あるべき親子関係を求めてしまうから。  
オ 「愛情が大切」などとまことしやかに「説教」する大人たちが一番怪しいことを、子どもの直感で分かっているから。

問九 傍線部⑤「児童文学の存在意義」とありますが、「児童文学」の役割とはどういうことですか。五十字以内で説明しなさい。

三

次の①～⑤の傍線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① 新しいソシキを作る必要がある。  
② A君の意見にキョウメイする。  
③ 大きな荷物をアツシユクする。  
④ 古くからのカンシユウに従う。  
⑤ 今までの態度をアラタめる

[問題はここまでです。]

